

腐女子世界に溶け込む「腐女子である自分」

— 対象化の困難性と他者性の不在 —

1. 目 的

本研究では、「腐女子」が「腐女子である自分」について、どのように感じ、考えているのかを明らかにする事を目的とした。

2. 方 法

関西圏の大学生・大学院生で、「腐女子（男性同士による恋愛を主題とするフィクションや想像などを嗜好する女性）であること」「腐女子の中でも腐女子を卒業する、もしくは、腐女子でない自分が想像できない人」を対象とした。

該当する3名に、自作のインタビューガイドを用いて、60分程度の半構造化面接を行った。その後、一週間の期間を開けて、PAC分析を用いた二回目の調査を行った。得られたデータを用いて、総合的な解釈を行った。

3. 結果・結論

「腐女子である自分」についての連想項目及びクラスターで共通して「腐女子である自分」をプラスに捉えているものが出現した。しかし、腐女子は隠すべきものであり、公にはならないという認識も同時に共通して存在していた。だが、腐女子を隠さなければいけないという部分のみが先行し、隠さなければならないほどの何かについて実感が伴っていないように感じられた。そんな腐女子の世界は、腐女子だけが理解できるものだけで満たされた「閉じた世界」となっており、そこで過ごす事は、とても楽しく、居心地が良いものである。また、腐女子というものは自身の中の深くに根ざしているものであることも共通しており、自分自身の中から腐女子である自分だけを取り出すという事はできず、分離が難しい状態とも考えられる。

腐女子について深く考えることがなかったという共通の語りや、腐女子だけの「閉じた世界」から、腐女子である自分は腐女子世界に溶け込まれ、自他を区別した視点を持たない傾向があると言えるだろう。自分と類似している同じ腐女子である他者が、自分自身を映す「鏡」のようなものとなり、より一層「閉じた世界」である腐女子世界に没入していくのではないかと考えられる。